

Title	臨床哲学ネットワーキング 分科会 自己言及班ワーキングペーパー
Author(s)	
Citation	臨床哲学. 2013, 14(2), p. 105-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24723
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

臨床哲学ネットワーク 分科会 自己言及班ワーキングペーパー

総説 自己言及班活動概観

服部圭祐

平成 24 年度のいわゆる「金曜 6 限」の授業「臨床哲学ネットワーク」の初回にて、「自己言及班」なる分科会が発足した。本ペーパーは、この「自己言及班」の今年度における活動内容を振り返ると共に、得られた結果・課題を確認し、来年度以降の自己言及班、臨床哲学研究室、そして各学生の研究活動に役立てることを目的とする。

自己言及班の今年度の活動は、一言でいえば「臨床哲学的な研究とはいかなるものか」という問いの探求であった。であるが、この課題も一年間を通してその内容の実質を大きく変化させることとなった。本節は、この問いそのものの変遷としての当分科会の活動の変遷を概観し、分科会としての活動の成果を確認するものである。本節の描かない、分科会の各参加者における具体的な活動内容については、本ペーパーの他の節にて言及されることになるであろう。

1 - 1. 前期における自己言及班の活動——「臨床哲学的な研究」への接近

前期の分科会活動は主に、個々の参加者の視点からそれぞれの「自らの研究」について話題提起し、議論を行うという形式で進められた。確かにこの各回の活動は、それぞれが「臨床哲学的な研究」を目指した結果としての各個の研究を巡って行われていた。しかし前期の分科会活動では、分科会自体が結成されてから間もなかったこともあり、事実上それらの「自らの研究」はばらばらに分離されており、それらがいかなる形で関係しあっているかは不明確なままであった。どのようにして「臨床哲学的な研究」に至っているか、という点は必ずしも議論の中で明らかではなかったのである。

自己言及班は前期の末、7月13日に「臨床哲学研究のフローチャート」なるものを作成し、金曜 6 限の全体会を提案、発表を行った。この「フローチャート」は、参加者それぞれの「自らの研究」の進行過程について大まかに分類し類型化することによって作成

された。この作業の目的は、それぞれの研究活動がある程度まで一般化することにおいて「臨床哲学的な研究」に、その理念からではなく、その実際の活動そのものから接近することにあつたといえる。しかしこの全体発表は、分科会で作成した件のフローチャートを提示し質疑応答を行うという、議論の中心点が定まりづらい発表の形式をとったことも作用し、分科会としての主張を十全に伝達したとは言い難いものとなってしまった。

分科会の事前の議論においては「当該フローチャートがアウトプットの部分を欠き、研究を完成できないこと」「フローチャートの諸段階を今後の研究活動において意識的に行うことの提案(相互評価の機会拡充等)」が主に伝達すべき主張として考えられていた。しかし、実際の発表では当該フローチャートが分科会参加者の研究の経験から導き出されたものであったという前提が議論の中で明らかでなく、議論の中心はフローチャートの内容の吟味もそこそこに、研究・調査活動における道徳的問題一般の方向へと移行してしまった。かの議論自体は無意味ではないだろうが、発表の意図からは些か外れたものといわざるをえない。

とはいえ、このフローチャート作成作業及び全体発表が無駄だったという訳ではない。一に、このフローチャート作成作業は、当分科会の参加者それぞれがばらばらに維持していたにすぎなかった「自らの研究」を結合させることで、事実上「臨床哲学的な研究」を分科会参加者にもたらす結果になった。というのは、この作業過程において行われたのは各参加者の「自らの研究」について、他の参加者の活動と何らかの形で共通点・類似点を見出すことであり、また同時に各参加者の「自らの研究」を、つぎ合わせられた共通点・類似点から翻って反省することだったからである。この結果は、フローチャート作成という作業がその理念からではなく実際の活動からの「臨床哲学的な研究」への接近であつた故のものであると考えられる。この作業は結果的に、分科会結成時点では分離していたそれぞれの「自らの研究」を、「臨床哲学的な研究」のそれぞれの形として捉えなおす機会となった。ただしこの「臨床哲学的な研究」は、まだこの時点では各参加者に意識されてはいない。あくまでこのときの各参加者にとっての前期の活動とは、互いのそれぞれの研究について話し合ったという以上のものではない。この「臨床哲学的な研究」が各参加者に意識され議論の俎上に上るには、後期の分科会活動を待つ必要がある。

また二に、この「臨床哲学的な研究」に関する議論が意識化されるのは、件の全体発表においてより多くの「自らの研究」と触れ合ったという機会によるところがある。全体発表における実際の議論の方向性が分科会で期待されていたそれとかみ合わなかったこと

は、当分科会の提示した「臨床哲学研究のフローチャート」が、分科会の議論の中で既に、ある程度各参加者の経験から独立した一般的なものとして共有されていたという肯定的な事実を一面で示している。しかし、その一般性へ至る経緯が発表中で述べられなかったために、フローチャートを初めて目にした他の分科会の各学生の「自らの研究」との差異がむしろ鮮明となり、議論の中心が一貫されなかったのである。当該フローチャートが分科会参加者の経験から導き出されたという点の不明瞭さが議論の混乱に一役買ったことは間違いないが、そのことは自己言及班が自らの活動自体の反省へと導かれる端緒となったともいえるだろう。

こうして自己言及分科会の前期の活動は、研究室全体あるいはそれ以上の規模に関わる「臨床哲学的な研究」と、個々の学生の「自らの研究」の差異が意識化されるに至った時に、その幕を一旦下ろしたのである。

1 - 2. 後期における活動——〈臨床哲学〉は存在しない

後期の自己言及班の分科会活動は、表面的には前期のそれと変化はしなかった。つまり、各参加者が自由に「自らの研究」に関し話題提起しそれについて議論する、という形である。しかし、その活動の実質においては少なからぬ変化が存在していた。その変化は「この研究を行うということが何を意味するのか」という議論が各回の活動において発生するようになった点に見て取ることが出来る。前期の活動は主に「この研究はどういうものであるか」の解説に、つまりは研究内容の対象的な取り扱いに終始することが多かった。それに対し、後期の議論においてはそれぞれの「自らの研究」自体と、一般的な「臨床哲学的な研究」の関係が取り沙汰されるようになったのである。これは、各回提示される「自らの研究」に関し、その研究を行う当人の「臨床哲学的な研究」との関わりについての自己言及が問題となっていたことを意味している。こうした論点の変化は、各参加者の関心の変化だけから説明されるものではなく、前期の分科会活動・全体発表を通してそれぞれの「自らの研究」が、「臨床哲学的な研究」の名の下に相互に結合あるいは同居していたことをその理由とするだろう。

自己言及班は12月14日、「臨床哲学を解放する」のタイトルの下に後期の全体発表を行った。このとき発表された内容は、その積極的なタイトルとは裏腹に、現在の「臨床哲学的な研究」の存立している状況そのままを意識化しただけのものである。

即ちそれは、「各学生の「自らの研究」が「臨床哲学」という看板の下に同居している」

という事実そのものが「臨床哲学的な研究」の実質的意味であり、それ以上の「臨床哲学という学問分野」「臨床哲学固有の知識・方法」などは存在していない、ということの自覚である。この事実の提示によって解放されるのは、自己言及班の参加者をはじめ、これまで「臨床」「哲学」の分野にまたがる、またはそれらを融合した第3の分野としての〈臨床哲学〉に「自らの研究」を一致させようとする不毛な努力にいそしむ学生である。そのような第3の分野としての〈臨床哲学〉を求める限り、彼らはけして求めるものに一致することはできない。なぜなら、そのような〈臨床哲学〉などは実際のところ存在していないからである。存在しているのは、それぞれの立場において「臨床」し「哲学」する各学生の「自らの研究」が結合しているという事実だけである。「臨床哲学」とは、この結合が起きている地点を指し示す場所の名前であって、専門的領域の名称ではないと気付いた時にこそ、彼らは「臨床哲学的な研究」に意識的に参与することになるのだ。

また〈臨床哲学〉という分野が存在しないことはその看板の無根拠を表すものではない。むしろこの看板に表されているのは、既存の分野の、或いはまだ存在していない分野の「臨床」の場に、またはそこで「臨床」する人々に種をまき、それぞれの「自らの研究」という花を咲かせる可能性である。この後期の全体発表においては、前期の「臨床哲学のフローチャート」の埋められなかった部分、即ち「臨床哲学のアウトプット」に、学術論文のみならず詩・小説・絵画などもまたそれぞれの「臨床」における研究成果として存立しうる可能性を示し、その空隙を埋めることになったのである。

上記のような内容を以てした後期の全体発表は、その意図からみてある程度芳しい結果を残したといえる。発表後の質疑・議論においては、発表内容そのものに対する批判は殆ど提出されず、発表の内容を受けた上での「臨床哲学的な研究」の今後の方向性の議論が中心となった。この議論が博士後期課程の学生からの提起を中心に行われたという点も、各個の研究がすでに結合している、という発表の内容に対する反応であるということから考えて、肯定的に受け取ってよい点だろう。

2. 「臨床哲学」の二つの課題——対外的戦略とブランド力

後期全体発表と、その後の分科会での反省から得られた今後の課題は以下の二点である。一に、「臨床哲学」の対外的な戦略に関する課題。臨床や研究の結合そのものを意味する「臨床哲学」の性格から考えて、臨床研究の場を創設することや、既存の臨床の場で行われている研究活動を「臨床哲学」の下に導くことは、その存立に不可欠な条件であるといえる。

このことは当然ながら、研究室の外部との折衝や人間関係の必要を示唆している。たとえ研究室が単なる看板に過ぎず特有の専門的内容を持たないとしても、これらの対外的な活動の中では「臨床哲学」という研究室に関して戦略的な言葉遣いや、その特有の価値の主張が必要となる。全体発表で中心となったのはこの課題に関する議論である。

少なくとも現時点では、自己言及班はこの課題に関する具体的な議論や方向性を立てていない。この課題の議論は来年度以降の活動に任せられるが、本ペーパーに示された今年度の自己言及班の活動の蓄積はこの課題に関する議論の発展に資するであろう。

二に、臨床哲学研究室の対内的な戦略、即ち臨床哲学についての認識の共有に関する課題。自己言及班後期の活動・全体発表において「臨床哲学」に関して一定の共通認識が得られたが、これは当然ながら研究室全体の共通認識や目標の成立を意味する訳ではない。後期全体発表の議論においても、博士前期課程や学部所属の学生からの反応・話題提起に限れば、それらは必ずしも活発だったとはいえない。来年度以降に新たに研究室に参加する学生を含め、研究室全体としての「臨床哲学」についての認識の共有は、ことによると先述の第一の課題よりも優先する課題となりうる。だが、自己言及班がたどり着いた「臨床哲学」の認識からすれば、この認識を理念的に共有するよりは、むしろ「臨床哲学」の共通認識を巡る議論が継続的になされるなかでこの課題が実質的に果たされることが望ましいであろう。

またこの第二の課題は、第一の課題との関連においてみれば「臨床哲学的な研究」の質もしくはブランド力に関わるものである。自己言及班が今年度一貫して議論したように、個々の学生がそれぞれの研究活動を行う際には、単なる学問的専門性としての価値ではないような「臨床哲学的な研究」の価値を各研究においていかに醸成するか、が問題となる。自己言及班が示したような「臨床哲学」の認識は、個々の学生が「臨床哲学的な研究」を探求する際の指針となるだろう。また「臨床哲学的な研究」が、異なる研究を行う他の学生との共通の目標である点に注目すれば、それは各個の研究における議論の、専門領域を超えた共有結合への端緒である。こうした機会を持つことは、各個の「臨床哲学的な研究」の質を高めることにつながる。そして「自らの研究」の「臨床哲学的な研究」としての価値を意識しておくことは、対外的な場面においても有用であろう。これらの観点からも第二の課題の重要性は大きい。

今年度の金曜6限「臨床哲学ネットワーキング」における自己言及班の活動概観は以上となる。本ペーパーが分科会の枠に囚われることなく今後の各学生の研究に役立つことがあれば幸いである。

「二足のわらじ」問題について

山口弘多郎

本節では、私が抱えていた問題（臨床哲学研究室の中で知られた問題でもある）が自己言及班の活動において、どのように解決されたのか、それを述べたい。

まず4月27日に、私が行った「自らの研究」についての話題提起を紹介したい。これは「研究者を志すことへの不安」という題で、現在の哲学における基礎研究（文献研究）の環境について、自己の経歴をもとに述べたものである。

通常、哲学の基礎研究は大学で行われる。研究者を志す者は、それぞれ研究対象となる哲学者を選び、その人物の著作を精読する訓練を大学で受ける。それは語学の習得でもあるし、哲学史の勉強でもあるし、論文作成能力を向上させることでもある。そしてその成果を研究会や学会などで発表し業績を作っていく。その際、「誰々における何々概念について」といったテーマ設定がとられやすい。

どの哲学者を研究対象とするかによって差は出るが、哲学の基礎研究は長期的なものになりやすい。というのも哲学書の議論は、長く難解であることが多いからだ。このため、論文の多産は非常に難しい。

ところで、現在、哲学研究を含む学問研究全般には、実学的な風潮、あるいは利益重視の風潮があるように思われる。つまり「研究がどれだけ社会の役に立つのか」「研究によってどのような利益（特許など）が得られるのか」といった点から研究を評価するという風潮である。この風潮の下で、大学側は学部の編成を組みかえつつある。例えば今の日本は超高齢社会だから、看護学部が開設される。国際化の時代だから、外国語学部が開設される、といったものである。

そのために文学部哲学科は厳しい状況におかれている。哲学の基礎研究がどれだけ社会の役に立つのか、それを明確に提示することが極めて難しいからである。この状況が続くなら、哲学科への就職、ひいては哲学科そのものの存続もますます厳しくなるだろう。博士前期課程を他大学で修了し、博士後期課程で大阪大学大学院臨床哲学研究室に所属した私は、こうした不安を抱えるとともに、臨床哲学的な研究の問題を抱えていた。

では次に、この臨床哲学的な研究の問題について述べたい。基礎研究で修士論文をまとめた私は、臨床哲学的な研究が応用研究のように思われ、基礎研究を充分に行っていない

自分が応用研究を行わなければならないことに強い抵抗を感じていた。また、現象学を研究している私にとって、現象学が現象学特有の方法を持つように、臨床哲学もまた臨床哲学特有の方法を持つものだと思います、どのようにその方法を身につけるのかという混乱も持っていた。

このような抵抗や混乱の根底には、臨床哲学的な研究の問題がある。これは、簡単に言えば、「臨床哲学的な研究とは何か」という問いである。少なくとも私には、臨床哲学的な研究は基礎研究と根本的に異なるもので、それ特有の方法によって行われなければならないものである、といった認識しかなかった。そのために基礎研究と同時並行で臨床哲学的な研究を行わなければならないのか、と考えていた。基礎研究だけでも時間がかかる上に、もうひとつ研究を行わなければならない。これが上手いかなければ、どちらも学問的に半端な成果しか出せなくなる。それは研究職に就くことを遠ざけることを意味する。基礎研究に重点をおくべきなのか、臨床哲学研究室に在籍する者として臨床哲学的な研究に重点をおくべきなのか。

臨床哲学研究室に在籍することによって、臨床哲学的な研究と自らの研究（あるいは活動）の二本槍で物事を進めていかなければならなくなる。こうした問題を、ここでは「二足のわらじ」問題と呼びたい。

この「二足のわらじ」問題は、自己言及班の前期の活動では解決されなかったが、後期の活動において進展があった。総説で述べられたように、自己言及班は後期に「臨床哲学を解放する」という題の発表を行った。これは、臨床哲学とは一つの学問的分野ではなく、一つの看板であるという主旨だった。自己言及班は臨床哲学的なものはないという見解に至ったが、これは、これまで出ていなかった答えに到達したというようなものではなく、すでに出ていた答えの自覚へ至ったというものであった。

私の場合にあてはめると、私は臨床哲学的なものがあると誤解していたのだ。そのために、「二足のわらじ」問題に苦しんでいたのである。では、上記の自覚に至ることによって「二足のわらじ」問題はどのようになるのか。

臨床哲学的なものがないのであれば、臨床哲学的な研究と基礎研究が異なるという認識は成立しない。臨床哲学に固有な方法がないのだから、基礎研究で学んだ方法を用いることもできる。臨床哲学という看板の下で、基礎研究に時間を割くことができるのである。基礎研究に基づいた、臨床と関わる研究を行う可能性も担保されたままである。

これは「二足のわらじ」問題の解決というよりは、解消に近いだろう。捉え方が変化し

ただで、状況はあまり変わっていないからだ。臨床哲学研究室では、基礎研究とその実践（例えば現象関連の文献研究と、ある事象の現象学的研究）といった仕方でも、二足のわらじをはくことができる。ただ、それが「臨床哲学的な研究でなければいけない」といった強迫観念に苛まれるような深刻な問題にならなくなったのだ。今後、二足のわらじが問題となる場合、それは、どちらの研究（あるいは活動）でも食べていけないという経済的な問題といったものになっていくだろう。

もし二足のわらじをはくなら、研究者を志す上で意義がある。論文を多産できない基礎研究のみでは、業績の数や研究成果の有効性が重視される現状では、厳しい状況に置かれ続けるだろう。しかし二足のわらじをはくことで、業績を出しやすくなり、臨床と関わることで研究成果の有効性を示すこともできるようになってくる。

臨床哲学を一つの学問的分野として捉えるのではなく、看板として捉えることによって、「二足のわらじ」問題は以上のように解消された。この問題は実践的な問題ではなく、臨床哲学をどう捉えるのかという認識的な問題だったのである。自己言及班の活動成果がどのような形で意味を持つのか、その一つの事例を本節で示すことができたなら、幸いである。

考えるきっかけとしての自己言及

川崎唯史

本節では、自己言及分科会での発表や話し合いが、参加者自身の活動を臨床哲学的な研究として捉える「きっかけ」になる可能性について、私の今年度の経験に即して検討する。分科会発足以前からすでに大学の外で対話の活動を行っていた私にとって、分科会での自己言及や全体会での話し合いがどのような意味をもち、どのように新たな局面を開いたのかを振り返ってみたい。以下、(1)現場に行く理由の掘り下げと(2)臨床哲学のアウトプットの探求の二点を考察する。

(1) 現場に行く理由の掘り下げ

前期の自己言及分科会は、各自の活動に自己言及することで臨床哲学的な研究について考えるという流れの中にあった。私も6月1日の分科会で自分の活動について話す機会

があった。学部生の頃から関わっているとよなか国際交流協会での「哲学カフェ」と「さんかふえ」について、短時間ながら紹介した。初めは研究室の先輩でありカフェフィロのメンバーでもある中川雅道さんに誘われて協会での哲学カフェに参加したこと、昨年度からは院生で協会職員でもある金和永さんと一緒に二カ月に一度の哲学カフェの進行役を探したり、哲学カフェの準備をしたりしていること、また、一昨年度の金曜六限「臨床哲学ネットワーク」の演習で「対話コンボ」分科会に属していたこともあって、哲学カフェよりも協会に密接に関わる対話プロジェクトである「さんかふえ」を、協会職員と協力して立ち上げ、一年にわたってほぼ毎月開催してきたことなどを話した。

その後の話し合いの中で、「なぜとよなか国際交流協会に行っているのか」と改めて問われた。そのときの私には明確な答えはなかったものの、たまたま中川さんに誘われたという「ご縁」と、協会という場所の「居心地のよさ」を理由として挙げたように記憶している。この日以降、何気なく口にしたこの「居心地のよさ」について、今年度の私は繰り返し考えることになった。

今年度の哲学カフェは、協会の事業との関連で「居場所」や「国際」といった大きなテーマを設けた上で各回の問いを決める形を取ったため、毎回の進行役と昨年度よりも綿密に打ち合わせを行った。そのため、昨年度よりも協会に行く回数が増えただけでなく、協会の事業や理念について考えることも多くなった。また、今年度のさんかふえは、新しく主な担当となった職員（金和永さんと山本房代さん）の意向もあって、毎月振り返りのミーティングを行うようになった。さんかふえに参加し、それを振り返るというサイクルの中で、私は自分がさんかふえに参加している理由、ひいては協会に通っている理由について、より自覚的に考え始めた。当初それは取り留めのない断片的な考察だったが、以下のような臨床哲学的な研究につながった。

年の明けた1月20日、私は臨床哲学研究会で「安全から安心へ——創造的な対話に向かって」と題した個人発表を行った。これは、上記の断片的な考察をまとめた形で提示したものである。さんかふえなどの活動と並行して進めている、いわゆる文献研究とは異なる方法・文体を取り、さんかふえについても不完全ながら考察した。

発表の主要な論点は「安心」と「創造的な対話」であった。前者は、上述したように私が協会に行く理由でもある「居心地のよさ」について私なりに掘り下げ、言語化した結果として出てきた主題である。後者もまた、自分が対話活動に参加する理由を問い直す中で対話の魅力として見出されてきた「対話における新たなものの創造」を考察したものであ

る。以前はメルロ＝ポンティの対話論に依拠して対話の創造的な性格を漠然と考えていただけだったが、さんかふえや哲学カフェへの継続的な参加と振り返りを通じて、安心と創造との間に関係があるのではないかと気づき、メルロ＝ポンティの暗黙の前提や、彼が言っていないことをも考えることができた。さらに、安心という主題を通して、対話だけでなくケアに関することがらについても、考察を深めていくための手がかりを得ることができた。

(2) 臨床哲学のアウトプットの探求

自己言及分科会は前後期ともに全体会を主催し、臨床哲学的な研究に関する発表を行った。その前後の分科会では臨床哲学のアウトプットについて主題的に話し合った。これをきっかけとして、私は自分自身の活動の一つであるさんかふえについてアウトプットの観点から考えるようになった。

昨年度のさんかふえについてのアウトプットを振り返っておくと、さんかふえ開催に至る経緯と途中までの開催状況の短い報告（「プロジェクトの報告」、『臨床哲学のメチエ』17号）と、参加者と協会職員を交えての座談会を文字に起こしたもの（「さんかふえ」のこれまでとこれから」、同18号）の二つが私の関わったものとして挙げられる。前者は記録のために事実を報告したものであり、考察は加えていない。後者は一年間のさんかふえについて数人で話しながら振り返ったものであり、私も考えながら話しているとはいえ、十分に考察を深められたとは言えない。いずれは本格的な考察を行いたいと考えていたが、その方法に悩んでいたというのが今年度開始時点での実情であった。

さて今年度は、臨床哲学研究室の教員でありさんかふえ開催当初からのメンバーである本間直樹さんの提案で、さんかふえ終了後に参加者の感想を数分間ビデオカメラに向かって話してもらい、振り返りのミーティングの際に観て話し合うという試みを始めた。年度の終盤には、継続して参加している数名の参加者も交えて振り返った。1月には、年度末の事業評価に向けて、参加者が感想を話すのを撮った映像からいくつかをピックアップし、集中的な分析を行った。

こうした映像の振り返りや分析は、複数の点でいわゆる学術的な研究とは異なっている。第一に、現場で入手したデータを研究室に持ち帰って密かに分析するのではなく、分析そのものも現場で行っている点。今年度は主に協会職員と臨床哲学研究室のメンバーで分析を行ったが、来年度以降は他の参加者がより積極的に関わってくれる可能性もある。

第二に、学術的な研究成果を出すためではなく、協会のプロジェクトとしてのさんかふえ

そのものに役立てるために分析がなされている点。さんかふえがどのような場として各参加者に捉えられているか、さんかふえはどのような場で協会のプロジェクトという役割を果たしているか、今後さんかふえをどのような場にするのがいいか、といったことを話し合う手がかりを得ることが分析の主眼なのである。もちろん振り返りや映像の分析は、例えば私にとっては安心や対話を考えるための手がかりにもなるが、それはあくまで副次的な産物にすぎない。

以上の点で学術的な研究から区別されるさんかふえの振り返り・映像分析は、現場の役に立つことを第一の目的としてなされるものである。とはいえ、例えば映像分析の記録として、映像の文字起こしとその分析結果を『臨床哲学』にワーキングペーパーとして掲載することは十分可能であろう。もし実現できれば、現場についての現場での思考の記録という意味で、臨床哲学のアウトプットの一つの形となるのではないか。こうしたアウトプットを実際に行うのは来年度以降の課題であるが、少なくともその可能性を見出すことができたのは今年度の収穫だと言えるだろう。

ここまで、現場に行く理由の掘り下げと臨床哲学のアウトプットの探求という観点から、自己言及分科会での話し合いが私自身の活動と研究にどのように役立ったかを振り返ってきた。ふだんの活動では前景化しない問題や可能性を発見するために、他の活動を行っている研究室のメンバーと話し合うことは有益である。さまざまな人の前での自己言及は、より深く、あるいは別様に考えるための、そして活動を研究につなげるためのきっかけなのである。

私の仕事と自己言及班

金和永

金曜 6 限の自己言及班において、私は当時嘱託職員として勤務していた、公益財団法人とよなか国際交流協会における職務内容について、二度発表したことがあった。一度目は、臨床哲学という看板を掲げる専門分野に所属する私の実践を発表することで、この職務と哲学との接点について考えることを目的にしていた。しかしながら、その目的は必

ずしも達成されたとは言えなかった。そしてまだ私は、現在の実践と研究といったことについて、明瞭な言葉を見いだせずにいる。(というよりは、私はこの一年の、そしてこれからのとよなか国際交流協会での実践を、研究というかたちで明確に対象化することを、少なくともいまは望んでいない。実践で学んだことが、論文執筆なども含めた様々な部分で生きてくるにしても。)

それよりも私は、二度目の発表が印象に残っている。その時自己言及班が私に提供してくれたのは、自分自身が抱える悩みについて相談する場所であり、そちらの方が私にとっては大きかったように思われる。それは、私の経験を捉え直す場であり、言語化を試みる場であった。

思えば、今年度ほど、自分自身の変容とこだわりを感じ、悩み、一喜一憂したことはない。今年度ほど多くの人に出会ったこともなければ、さまざまな問いに出会ったこともない。それらの経験はしかし、書き留めたり、言語化したりすることなしには、日々の業務に追われる中で忘れてしまう。あらゆるものは体験ではあるが、それを私自身の時間に位置づけることによってはじめて「経」験として、意味を持つてくる。

その日の分科会で私は、自分の現在の悩みについて話した。それは哲学の研究に関わる悩みなどではなくて、単純に私が仕事をする上でうまくいかないことや、この仕事をするために自分自身を変えたいのに変われないといった、ありきたりなものだ。それでも、その時に私の悩みから始まって班のメンバーで話されたことは、今でも私の体験を経験として構成するのに役立っている。

仕事を始めた当初、私はやはり、なにか「哲学」に関係するような関わり方を、とよなか国際交流協会の職務の中でできるのではないかと、思っていた。もちろん、「哲学カフェ」や「さんかふえ」は、臨床哲学のメンバーである本間直樹さんと川崎唯史さんとともに関わっていたことなので、それらの対話の活動を協会職員として考える上で、これまでの経験を他の職員の方と共有し、共に場について考える、という職務は果たしていたかもしれない。しかし、それ以外にも、私は様々な職務を補助的な位置としてではあるにせよ任されていた。そこに私に加わることで、何か良い変化や影響があれば、という思いが強かったのだろう。これまで学んできたことをこの職場で活かすことを、当初はあれこれと考え、何も出来ないと考えて苦しんでいたように思う。

しかし、仕事を続けていくうち、このような考え方は不必要だと気づくことになった。

私にできることは、結局のところ、ミッションを共有し、それに基づいてまさにこの団体の一員として働くということなのだし、それが求められている。そこから一步身を引いて考えるという作業は、「協会職員」という立場では難しく、また時には悪影響ですらあるかもしれない。徐々に仕事を覚え、担当する仕事も増えていった、という物理的な理由もあっただろう。

結局、それから私は仕事に没頭するようになった。一方で、なかなか自分の活動を捉え返す機会を作ることは出来ず、日々の仕事を続けていった。そのような状況が何ヶ月か続いたあとで、自己言及班で私が話す機会をもらったのだ。その場は、私の仕事のなかでの変容や、私自身の抱える問題・課題と仕事との接点を考えることのできた、貴重なものとなった。

もし仮に、私が仕事に本当に身を入れず(つまり、ミッションを共有し、そのために動き考えることをせずに)いつまでも「哲学と実践」を分け、一步引いて自分を位置づけていればどうなっただろう、と思い巡らす。協会にとっても自分自身にとっても、ただただ、誠実ではなかっただろう。私が役割を果たし、また自己言及班が良い振り返りの機会となるためには、没頭することが必要だったのだ。

こうして振り返ると、私もまた自己言及班の歩みと同じく、「哲学的な何か」を探して苦しんでいた。それから私は、状況に促されて「哲学と実践」という二分法をやめ、ただ仕事に没頭することになった。そして、没頭するなかで感じていた何か、言語化するにはまだプリミティブな、感情にとどまるような次元のものを言葉にする機会を与えてくれたのが自己言及班だった、ということになる。

「経験の質」という言葉を、私は後期の自己言及班で私がメンバーの一人から受け取り、これは今も私が参照する言葉となっている。身を入れずして、経験の質が生まれる可能性はないだろう。そして、実際に経験に質をもたらすのは、まさに自己言及し、活動を振り返る時ではないか。しっかりと身を入れて体験し、それをある連続性のなかで捉えなおす。実践と哲学を分けて考え、実践のなかに哲学を持ち込もうと考えたり、実践を哲学的に捉えたりしようと、無理に考える必要はない。ただ、私が巻き込まれている問題に身を入れて向き合い、良いタイミングで振り返り、アウトプットする。それでよいのではないか。このように言い切ってしまうと「臨床哲学」である必要が全くなくなってしまうように見えるが、自己言及班のひとまずの結論は、「それで良い」だったと、私はとらえている。

「臨床哲学的な研究とは何か」という問いに、自己言及班ははじめから完全に方向づけられていたのではない。むしろ、まず互いに「実践」という言葉をめぐって、自分の活動や思いを語ることから自己言及班は始まったのだ。それを互いに聴き合うという環境のもとでこそ、実践と研究という二分法に改めて焦点があたることもあれば、私のように、言語化を通じた実践の再構成と自分自身の変容の場として機能することもあったのだろう。ここで私が取り留めもなく書いた、仕事と自己言及をめぐる経験は、ただただ青いものだけということにはわかっているつもりである。この文章自体がひとつの自己言及でしかなく、普遍性などもとよらない。ただ、青い私、成熟などしそうなでもない私には、自己言及を「臨床哲学」という人びとと場で出来ることが貴重だったのだ。自己言及は必要である。そして、「臨床哲学」が自己言及の場を用意しておくことが必要である。分科会としてこれからも存続するかどうかは分からないが、自己言及できる場、それを聴き合う場を、私は臨床哲学の中で維持したいと考えている。

「種になること」としての「臨床哲学」

大北全俊

「自己言及班」という名前を提案したのは、確か私だったと思う。多少、冗談のつもりもあった。参加者がただ自分の抱えているものを話すための場を、少しだけアイロニカルに表現したかった。

助教の仕事を与えられてから、これまであまり自分が大学の外で行ってきた活動や研究を臨床哲学研究室では披歴してこなかったように思うし（散発的には割と話をしてきたようにも思うが）、例えば金曜6限の分科会の一つにして協力者を募るということをしてこなかった。思えばそれは、なぜなのか。「怠慢」と申告したほうが正直でもあるし分かりやすいように思うが、それだけではない、何か「もちこみにくさ」はあった。その「もちこみにくさ」がなんだったのか、まだ整理できてはいない。私個人の性格の問題か、それとももう少し構造的なものか、両方のように思わなくもない。HIV感染症のことについても、また病院で行われている臨床倫理に関する取り組みについても。いま、あえてそれら

の「もちこみにくさ」についてごく簡単に触れるとしたら、それは「時間」に関係することのように思う。時間の長さ、そしてそのリズムと。特に、金曜6限という大学の授業のスケジュールにはどうしてもフィットしないように思えた。そして、関わるフィールドの人たちやそこでの取り組みを形にしていくこと、そしてそれらを言葉にしていくこと、それには時間がかかる。しかも、読めない。そのような時間を共有しようと思うと、よっぽどのコミットメントを他の人に求めることになる。それはまるで、「友」を探すことに似ている。

そして、私のような「もちこみにくさ」を抱えている人は、おそらく他にもいるだろうと思っていた。それは、自分自身が院生だったときから、身近な人を捕まえては話をしてきたテーマでもあったように思う。「二足のわらじ」という風に言われている課題もあるが、私の場合はこの「もちこみにくさ」も無視できない課題だったように思う。院生のころ、釜ヶ崎（なぜか一括変換しない）に関わっていた時も、そして同時にセクシュアリティのことについて考えていた時も。かえって研究室を離れてから、活動は活動、そして研究は研究で bioethics の一部と割り切ることができ、自分のなかで風通しは良くなったように思う。しかし、どこかにおいたままにした課題があるような、そういう落ち着かなさはあった。「自分の抱えている課題を、どう哲学にするのか」。そういった気持ちが強くなり始めた時に、偶然にも助教として研究室に戻るようになった。

しかし、やはり、割と初めから、私は自分の課題を研究室にはもちこまないだろうと、思っていた。そして、この研究室には他にも同じようなもちこめなさを抱えている人はいるだろう。いなければいけないでも別にいい。しかし、もし一人でもそういうもちこめなさを抱えている人がいるのであれば、その人との場が分科会としてあってもいいと思っし、むしろ必要だとも思った。院生だったとき、夜を徹して話し合った友人との時間は、今から思えばこの上ない糧になっている。分科会の時間では、そのような友人との時間の代わりになることはできないが、もしかしたらその足掛かりになるかもしれない。

蓋を開けてみたら、思ったより参加者が多かった。というよりも、学生のほうからニーズが上がってそれに私が乗ったというほうが正しい。こうして、「私の自己言及班」(私有化しているという意味ではなく)は始まった。

参加者の話はどれも印象深く、また私の糧になった。それはごく私的なことでもあるので、ここでは語らないとしても、やはり一番印象的だったのは、院生の中川さんが臨時で参加したとき、臨床哲学の立ち上げ趣意書についてみんなで振り返った時のことだろう。

「臨床哲学」とは何か。趣意書を読み、そして話し合う中、おぼろげながらに浮かび上がってきたのは、そのようなものは、ない、ということだった。自分の抱えているものを持ちこみ、「臨床哲学」固有のものに変換し、そのようなものが蓄積され、ある別世界を構築する、そもそもそのようなテリトリーを作る試みではない。そのような試みは、ありえない。ただ、ひとりひとりが自分の課題を抱え、ある時期、たまさか交差する、それだけの場。それぞれが自ら種となり、それぞれの場で根を下ろし、育む。ただ、なんらかの仕方で、一度この場で交差した人たちは、風の便りにでも、その各自の試みを届く人にだけでも知らされる。恥ずかしながら、今になってようやく「臨床哲学」の試みの意味を理解したし、また、そのたまさかの交差とそのたくらみのないネットワークが実は非常に貴重でもあることに気付いた。「もちこめなさ」に頭を悩ませていたが、そもそももちこむ必要はなかったのだ、あらゆる意味で。

助教としてつとめさせていただいている間、そしてこの一年、自己言及班に関わりながら、まだ形にはなっていないが、自分なりにテーマはみえてきたように思う。これから自分の課題を、自分なりの場で取り組み育てていければと思う。

そしてそれは、もちこむ、というのではなく、風の便りに届くべき人に届けることができれば幸いである。

嗚呼、已んぬる哉

辻明典

「自己言及班」での活動は、「自分自身について語る」ことから出発する。つまり、自分自身について語る語り手が、語り手にとって避けては通れぬ課題と、どのように付きあってきたのかを表明することからはじまる。

自己言及班の活動は、極めてシンプルである。自分自身が抱えている問題、悩みについて話すこと。これである。例えばそれは、学校、医療現場、哲学カフェといった現場に赴いたときに感じる、「…に戸惑った」「…がうまくいかなかった」「…に対しては、私はどう反応すればよかったのか？」という体験を語ること。しかし、それだけではない。自らの体験について語る以上に、「そもそも、なぜこの活動に、私は従事しているのか?」「な

「ぜ私は、この問題について語ろうとしているのか？」「一体、なんのために？」といった、語り手自身的前提を丁寧に追及し、これを問い直していく作業も要求される。

しかし、自分自身について語るということは、想像以上に難しい。白状すれば、私自身は全くといっていいほどできていない。私が、金曜6限の時間で発表したのは、2012年10月26日だった。内容は、福島県南相馬市で、同年10月21日に開催した、哲学カフェについての報告である。南相馬市は、私が生まれ育った場所であり、東日本大震災と福島第一原発の事故の影響を大きく受けた町である。

私が自己言及班のなかで話したのは、南相馬で哲学カフェを開くために踏んだ交渉の手順、交渉の過程で実際に起こった出来事の数々、そこで感じた戸惑い、当日の様子、などである。また、自分が大切にしていることも話した。交渉をするためには人と直接に会うこと、自分の言葉で説明することをとても大切にしたこと。商店や、市の施設などに、哲学カフェの宣伝のためにチラシをおかせてもらうときも、直接に足を運び、現物を見せ、趣旨を説明し、頭を下げてもらったこと。当日はどんな人たちが何名参加し、どのようなことが話されたのかも説明した。遠方で介されるが故に、今後の資金をどうすればいいのだろうか、思案していることも話しただろうか。私は、起こった出来事を順番に、できる限り私情を挟むことなく語ろうとしていた。

発表直後、私は、自己言及班のメンバーの一人から、「自分自身の問題について、まったく触れられていない」といった趣旨の意見をもらった（私はそう記憶している）。私は、その瞬間は、その発言の意味が十分に理解できなかった。私自身に関わる問題について語ったはずなのだが…自分の両親も、親族も、友人も住んでいる町で実施した哲学カフェについて語ったはずだった。しかも、震災と原発事故については、生涯をかけて問い続けていく心もちでいる問題である。一体どういうことか！？しばらくの間、私は混乱していた。

議論を続けるうちに、だんだんとではあるが、「なぜ自分は、南相馬市で哲学カフェを開いたのか？ なんのために？ 何を大切にしているのか？」といったことが、自分自身のなかでまだまだ不明瞭であるという事実と向き合わざるをえなくなってきた。私は、この問いと正面から向き合って考えることを、ずっと避けてきた。それを考えることは、私に

とって余りにも苦しいからだ。しかし、それは、まんまと見透かされてしまったのだ。

哲学カフェを開催したい、少しずつでもいいので対話の場を開いていきたいという旨の話は南相馬に住む人に持ちかけたとき、私は以下のように語ってきた。南相馬に住む人びとの間には、放射線に対する認識の違い、被災後に受け取った保証金の額の違いなど、さまざまな要因によって人びとに分断が生まれている。自分自身が今感じていること、考えていることを話し合い、それぞれの意見を摺り合わせる場所を少しずつでも開いていかなければ、住民同士の関係性が荒んだ町になると危惧している。これは私自身、ずっと思い続けてきたことだ。この主張には、一点の曇りもない。しかし、それだけでは何かが足りない。

私が口をつぐみ、沈黙が教室を支配しかけたとき、誰かがこのようなことを言い放った。

「確かに、南相馬での哲学カフェは、意味のある試みだと思う。しかし腑に落ちないのは、自分自身にとって重要な悩みや問題が、ほとんど語られていないことだ。」

私は、自分自身が抱える悩みについて、十分に語ったわけではなかった。あくまでも、自分自身について語っているつもりでしかいなかった。

確かに、哲学カフェを開くにいたるプロセスでの困難さを口にはした。初めての試みということもあるが、開催に至るための過程のなかで、「そもそも、対話とはなんだ?」「哲学って何をするんだ?」といったことは、繰り返し問われた。当初はこのような問いとも真正面に向き合い、真摯に答えていた。しかし、懇切丁寧に説明したところで、「意味がよくわからない」の一言や、「まだ若い」というたったそれだけの理由で一蹴されることがたびたびであった。

しかしこれらは、「なぜ、南相馬で対話をするのか?」という問いと向き合ったがゆえにでてきた悩みではない。むしろ、うまく事が運ばないことに対する苛立ちであり、愚痴である。自分自身がなぜこの活動に惹きつけられているのか、対話を重視しようとしているのか。何に突き動かされているのかについては、言及することはなかった。私自身が、「なぜ、南相馬で対話をするのか?」という問いと向き合った上で、自分自身の活動を語っているわけではなかった。自己言及班で私が発表したことは、今から考えてみても、切実さの欠けた言葉だけがちりばめられている気がしてならない。人受けのいい言葉を並べることなど容易である。どうも「自分が何を大事にして、この活動に関わろうとしているのか?」

という問いと、私自身が十分に向き合わぬままに、活動に没入しているのかもしれない。

ここまで書いて、『臨床哲学』のVol.13に投稿した時のことを思い出した。哲学をエッセイに託すために、自分自身の経験について書いたのだが、あの時は、自分自身について書くことがここまで苦痛なのかと思うほど煩悶した。「走りながら考えている最中だ」といってしまえば、聞こえはいい。発表をしてから約3ヶ月たった2013年1月にこの原稿を書いているが、自分自身について語ることは、まだに十分にできていないと感じている。